

別れのことば

言語社会研究科長 槽谷啓介

三浦さん、このような形でお別れのことばを捧げることになるとは、まったく予想もしていませんでした。あなたが病院の診断について打ち明けてくださったのは、二月末か三月初めのことだったと思います。あなたはいつになく気落ちした表情でしたが、わたしはあなたが全快して戻ってくるのを信じていました。しかしその思いもむなし、わたしたちは一〇月に悲しい知らせを受け取らねばならなかったのです。

三浦さん、あなたが言語社会研究科に來られたのは、二〇〇一年という世紀の始まりの年でした。一九九六年に発足した言語社会研究科は、一橋大学のさまざまな事情を背負って出発しました。だからこそ、研究科が一層の飛躍をとげるためには、発足当時のメンバー以外の新しい人材を迎えることが切実に求められていました。三浦さん、あなたはまさにそのときに研究科にやって來られたのです。それ以來あなたは、英語圏文学と批評理論を柱にした研究教育を中心になって推進してこられました。そのご努力が実り、近年では言語社会研究科でなくてはできない研究を求めて、多くの志願者が言語社会研究科に応募しています。他のどの研究科にも見られない大胆で斬新な視点にもとづく研究の開拓、まさにこれこそ言語社会研究科が当初から求めていた方向付けでした。三浦さん、あなたはその意味で言語社会研究科のこれからの方向をしっかりと定めてくださったのです。

三浦さん、あなたは当初バーセルミを中心としたポストモダンニズム文学の研究者として出発されました。わたしは専門外の人間なので的確な判断はできませんが、『ポストモダン・バーセルミ』などの著作を読むと、ポストモダンニズムとあなたが美しく共振しているさまを見る思いがしました。しかし、二〇一二年度の研究科紀要『言語社会7』を見て、わたしは驚愕しました。そこであなたは特集「マルクス主義批評の現在」を編まれ、論文「労働者のアイデンティティ・ポリティクスに向けて——九〇年代を考える」を寄せられました。そこであなたは、二〇一一

年に世界のストリートで起こった状況を「批評」の問題としてとらえ返しつつ、九〇年代に出現した批評理論の限界を論じ、左翼的想像力が「貧困」の問題を見逃してきた原因を鋭く追究なさっています。私がこの論文に感動したのは、あなたの批判がおそらくはかつてのご自身にも向けられていたように感じたからです。外部からの気ままな批判とは一線を画した迫力ある筆致はそこから生まれたのだと思います。だからこそ、わたしはあなたのこれからの研究の新たな展開を切望していました。それだけに、その道が突然断たれてしまったのは、残念でなりません。

三浦さん、あなたが最後まで心にかけてくれたのは、博士論文の審査でした。一〇月九日、まさにあなたが旅立たれたその日のほぼ同じ時刻に、われわれ研究科のメンバーは会議室であなたの審査報告を聞いていたのです。その審査報告はあなたの絶筆ともいえるように思います。しかし、にもかかわらず、そこには衰弱の陰は微塵もありませんでした。あなたは普段と変わらぬ鋭い視点と力強い文章によって、申請論文の内容を正確に理解し、学的達成を的確に評価するとともに、その問題点を厳しく指摘しています。しかしそのときでも、執筆者への励ましという暖かい眼差しが感じられました。それはあなたの研究者として、そして人間としての誠実さ、暖かさだったのだと思います。報告終了後、無事に博士学位は承認されました。三浦さん、あなたはそれを見てほっとして旅立たれたと、わたしは信じています。

あなたが最後の日々を示された思いや営みは、完全な形ではわたしたちに伝わらないでしょう。しかし、わたしたちが聞き取ろうとするなら、その痕跡は微かな印として世界のあらゆる場所から伝わってくるはずです。わたしたちはそれらを頼りにあなたにもう一度近づきたいと思っています。もちろん、生者の思いは自分勝手なものです。でも三浦さん、あなたはそれを見て憤慨するよりも、「何やってんの。やめてよ」といつものように笑って答えてくださるような気がします。

三浦さん、どうか安らかにお眠りください。